

2017年版 デュプリケートブリッジの規則

リボークに関する注釈

ver 1.05 2018/11/17

仲村篤志

－ 索引 －

第14条	紛失したカード	16
第43条	ダミーが受ける制限	18
第45条	プレイされたカード	20
第50条	ペナルティカードの処置	22
第54条	表向きに出した順番外のオープニングリード	22
第61条	スートにフォローしないことーリボークに関する質問	2
第62条	リボークの訂正	6
第63条	リボークの成立	10
第64条	リボーク成立後の手順	12
第65条	トリックの並べ方	24
第66条	トリックの検査	24
第67条	過不足のあるトリック	26
第72条	一般原則	28
実際の裁定例		30

規則の目的

規則はデュプリケートブリッジの正しい手順を定め、それからの逸脱による損害に対して、相当の補償をすることを目的としている。

また、規則は違反行為を処罰することではなく、違反行為によって非反則者が損害を被った状況を調整することを目的としている。

(デュプリケートブリッジの規則 前書きより)

第61条 スートにフォローしないこと

－ リボークに関する質問

A. リボークの定義

第44条で定められたとおりにスートにフォローしないこと、または規則で要求されているか、カードやスートのリードやプレイができるのにしないこと、または対戦相手が違反行為の調整で要求したカードやスートのリードやプレイができるのにしないことはリボークになる（要求に従うことができないときは第59条参照）。

B. リボークの可能性について質問する権利

1. ディクレアラーは、ディフェンダーがフォローしなかったとき、リードされたスートのカードがないか質問することができる。
2. (a) ダミーはディクレアラーに質問することができる（ただし、第43条B項2(b)参照）。
(b) ダミーはディフェンダーに質問することはできない。違反行為には第16条B項を適用することがある。
3. ディフェンダーはディクレアラーに質問することができ、また、ディフェンダーは互いに質問することができる（ただし、この質問をしたこと自体が不当な情報となる可能性がある）。

C. トリックを調べる権利

リボークが指摘されたからと言って、終了したトリックの検査が認められるわけではない（第66条C項参照）。

(続く)

L61A

○第44条『プレイの順序と進行』

C項『スートにフォローする義務』

トリックに対してプレイするときは各プレイヤーは可能なスートにフォローしなければならない。この義務は規則のどの義務よりも優先する。

第44条C項に違反するとリボークになる。「この義務は規則のどの義務よりも優先する」ことに注意する。

○下記のときもリボークになる。

- (1) リードの要求に応えることができるのにリードしなかったとき。第50条D項2(a)（メジャーペナルティカード対して）。
- (2) プレイの要求に応えることができるのにプレイしなかったとき。（第57条A項 ディフェンダーの早まったプレイに対して）
- (3) カードの不足でカードがハンドにあったとみなされる時。第14条、第67条。
さらに次のときはリボークが成立したものとみなされる。
- (4) 違反行為をしたダミーがディクレアラーにリボークの可能性を尋ねて、実際にリボークしていたとき。
第43条B項2(b)。
- (5) トリックにカードをプレイしなかったとき。第67条。

○第59条は『要求されたとおりにリードまたはプレイできない場合』

L61B

○ダミーはリボークの可能性について、ディフェンダーには質問ができない。実際のリボークの有無にかかわらず質問自体が不当な情報になる。

○ダミーがディフェンダーにリボークの可能性について質問し実際にリボークしていたとき、成立する前ならばリボークは取り消す。取り消したカードはメジャーペナルティカードになる。ダミーには第90条『手順違反のペナルティ』を科すことがある。（続く）

第61条 スートにフォローしないこと**ー リボークに関する質問（再掲）****A. リボークの定義**

第44条で定められたとおりスートにフォローしないこと、または規則で要求されているか、カードやスートのリードやプレイができるのにしないこと、または対戦相手が違反行為の調整で要求したカードやスートのリードやプレイができるのにしないことはリボークになる（要求に従うことができないときは第59条参照）。

B. リボークの可能性について質問する権利

1. ディクレアラーは、ディフェンダーがフォローしなかったとき、リードされたスートのカードがないか質問することができる。
2. (a) ダミーはディクレアラーに質問することができる（ただし、第43条B項2(b)参照）。
(b) ダミーはディフェンダーに質問することはできない。違反行為には第16条B項を適用することがある。
3. ディフェンダーはディクレアラーに質問することができ、また、ディフェンダーは互いに質問することができる（ただし、この質問をしたこと自体が不当な情報となる可能性がある）。

C. トリックを調べる権利

リボークが指摘されたからと言って、終了したトリックの検査が認められるわけではない（第66条C項参照）。

- L61C
- リボークの確認をするため終了したトリックを検査する権利はプレイヤにない。第66条C項『終了したトリック』よりディレクターが必要と認めたときだけ、終了したトリックの検査が認められる。
 - ディレクターはリボークが成立したかしないかに関する検査の目的の他に終了したトリックの検査を必要としない。明らかにリボークが成立しているような状況ならば、リボークの訂正ができないためプレイの続行を指示する。プレイ終了後にリボークの有無を含めて裁定すればよい。

第62条 リボークの訂正**A. リボークを訂正する義務**

リボークが成立する前に違反行為が指摘された場合、プレイヤーはリボークを訂正しなければならない。

B. リボークの訂正

リボークを訂正するには、反則者はカードのプレイを取り消して、代わりに合法的なカードを出す。

1. 取り消されたカードは、すでに表向きに置かれていたカードを除き、ディフェンダーのハンドからプレイしたものであればメジャーペナルティカード（第50条参照）になる。
2. カードがディクレアラ（第43条B項2(b)の制限内で）またはダミーのハンドからプレイされたか、あるいはディフェンダーの表向きに置かれていたカードの場合、調整なしで入れ換えることができる。

C. リボークの後プレイされたカード

1. 非反則側の各プレイヤーは、リボークの後、リボークが指摘される前にプレイしたカードをすべて取り消して、ハンドに戻すことができる（第16条C項参照）。
2. 非反則側が上記のようにカードを取り消した後、次の順番の反則側のプレイヤーはカードのプレイを取り消すことができるが、このプレイヤーがディフェンダーの場合、プレイを取り消したカードはペナルティカードになる（第16条C項参照）。
3. 同一のトリックにおいて双方の側にリボークがあり、一方の側だけがその後のトリックにプレイを行っている場合、双方がリボークを訂正しなければならない（第16条C項2参照）。ディフェンダー側の取り消したカードはすべてペナルティカードになる。

(続く)

L62A ○リボークが成立する前に指摘されたリボークは訂正されなければならない。

○リボークが成立するとリボークを訂正することはできなくなる。リボークの成立に関しては第63条。

L62B ○第50条『ペナルティカードの処置』

○第43条B項2(b)は、ダミーが制限を受けていたとき。
○リボークが訂正されたとき、取り消されたカードがディクレアラ側の場合はハンドに戻してそれ以上の調整はない。ディフェンダー側の場合はメジャーペナルティカードになる。

L62C ○第16条C項『取り消したコールやプレイから得た情報』
○非反則者は取り消されたカードの後、プレイしたカードを無条件で取り消すことができる。

○反則者側は1つ前の非反則者がプレイを訂正しない限り、カードを取り消すことはできない。さらにディフェンダーのときは取り消したカードがメジャーペナルティカードになる。

例) ディクレアラから♠6、♥4、♠Q、♠Kとプレイされた。♥4はリボークだったため訂正され♠Aがプレイされた。♥4はメジャーペナルティカードになる。

(1) ディクレアラはダミーからプレイした♠Qを訂正して♠ローに変えることができる。そのときは、ディフェンダーも♠Kを訂正することができるが♠Kはメジャーペナルティカードになる。

(2) ディクレアラがダミーからプレイした♠Qを訂正しないと、ディフェンダーは♠Kのプレイを取り消すことができない。このトリックは♠6、♠A、♠Q、♠Kとプレイされたことになる。(続く)

第62条 リボークの訂正（C項再掲）**C. リボークの後プレイされたカード**

1. 非反則側の各プレイヤは、リボークの後、リボークが指摘される前にプレイしたカードをすべて取り消して、ハンドに戻すことができる（第16条C項参照）。
2. 非反則側が上記のようにカードを取り消した後、次の順番の反則側のプレイヤはカードのプレイを取り消すことができるが、このプレイヤがディフェンダーの場合、プレイを取り消したカードはペナルティカードになる（第16条C項参照）。
3. 同一のトリックにおいて双方の側にリボークがあり、一方の側だけがその後のトリックにプレイを行っている場合、双方がリボークを訂正しなければならない（第16条C項2参照）。ディフェンダー側の取り消したカードはすべてペナルティカードになる。

D. 12トリック目のリボーク

1. 12トリック目のリボークは、リボークが成立しているときでも、4つのハンドがすべてボードに戻される前に発見された場合には、訂正しなければならない。
2. 12トリック目にディフェンダーが、パートナーがトリックにプレイする順番の前にリボークした場合には、第16条C項を適用する。

L62C3

- 第16条C項2、反則側にとっては不当な情報。
- ダミーからサイドスーツをリードしたとする。2番手はフォロー。ディクレアラールはリボークしてラフをした。4番手はオーバーラフし、次のトリックのリードをした。
ここでディクレアラールが自分がリボークしていたことに気がつき申告した。そこでオーバーラフしたプレイヤもリボークだったことに気がついたとしよう。
 - ・ディクレアラール側は次のトリックにプレイしていないのでリボークが成立していない。
 - ・ディフェンダー側は次のトリックにリードしているのでリボークが成立した。
 このときは双方のリボークを訂正する。ディフェンダーが取り消したカードは2枚ともメジャーペナルティカードになる。

L62D

- 12トリック目のリボークは反則者側が13トリック目にプレイしてリボークが成立していたとしても、リボークを訂正する。
- 4つのハンドがボードに戻された後はリボークを訂正しない。第64条C項『損害の補償』を適用する。
- 第16条C項は『取り消したコールやプレイから得た情報』
- リボークが訂正されると、取り消したカードはメジャーペナルティカードになる。メジャーペナルティカードは机の上にある間は正当な情報（第50条E項）だが、12トリック目のリボークのときは、不当な情報として扱う。反則者のパートナーがまだ2枚のカードを持っているときは有利に示唆されるカードをプレイしてはならない。

第63条 リボークの成立**A. リボークの成立**

次のときに、リボークは成立する：

1. 反則者またはそのパートナーが次のトリックにリードするか、またはプレイしたとき（合法か違法かに関係なく、このようなプレイはすべてリボークを成立させる）。
2. 反則者またはそのパートナーが次のトリックにプレイするカードを名指したり、指定したとき。
3. 反則側が口頭またはハンドを見せるなどの方法で、トリックの「取り」または「取られ」の宣言を行ったとき。
4. 対戦相手の「取り」や「取られ」の宣言への合意が（第69条A項の定めるとおり）成立したとき。すなわち反則者側が、ラウンドが終了する前か、次のボードでコールする前に、異議の申し立てをしなかったとき。

B. リボーク訂正の禁止

リボークが成立すると、訂正してはならない（ただし、12トリック目のリボークには第62条D項を適用し、双方による同一トリックでのリボークには第62条C項3を適用する）。この場合、リボークの起きたトリックはプレイされたとおりに成立する。

- L63A ○第43条B項2(b)において違反をしたダミーがリボークに関する質問をして実際にリボークしていたとき、訂正はするがリボークが成立したものとして第64条『リボーク成立後の手順』を適用する。
- L63A1 ○リボークの後、反則者側が順番外にリードしたとする。順番外のプレイは違法なプレイで取り消されることがあるが、次のトリックにリードした事実には変わりはないのでリボークは成立する。
- L63B ○第69条A項『合意の成立』。

第64条 リボーク成立後の手順

A. 自動的なトリック調整

リボークが成立したとき：

1. 反則したプレイヤー^{*19}がリボークの起きたトリックを取った場合、リボークの起きたトリックと、反則側がこれより後のトリックを取ったときはその中の1つを、プレイ終了後に非反則側に移す。
2. 反則したプレイヤー^{*19}がリボークの起きたトリックを取らなかった場合、反則側がこのトリック、あるいはこれより後のトリックを1つでも取ったときは、1トリックをプレイ終了後に非反則側に移す。

B. 自動的なトリック調整を行わない場合

リボークが成立したときでも、以下の場合には自動的なトリック調整は行わない（ただし、第64条C項参照）。

1. 反則側がリボークの起きたトリックを取らず、その後もトリックを1つも取らなかった場合。
2. 同じプレイヤーによる同じスーツでの2回目以降のリボークで、最初のリボークが成立している場合。
3. ペナルティカードやダミーのカードをプレイしなかったことによるリボークの場合。
4. 非反則側が次のディールのコールを行った後、リボークが初めて指摘された場合。
5. ラウンドが終了した後、リボークが初めて指摘された場合。
6. 12トリック目のリボークの場合。
7. 同じボードで双方の側がリボークして、双方のリボークがともに成立している場合。
8. リボークが第62条C項3の定めにより訂正された場合。

（続く）

^{*19}この条項の適用に当たり、ダミーが取ったトリックはディクレアララーが取ったことにならない。

L64A

- リボークの後、非反則側が「儲からなかった。」と不平を言うことがある。ディレクターは1ページにある規則の目的を説明する。非反則側の不満は1997年以前の規則に由来することが多い。
- 2007年規則から「リボークのペナルティ」という用語は使用されていない。「リボークの調整」であり「自動的なトリック調整」と「自動的なトリック調整を行わない場合」である。
- リボークの後（リボークのトリックを含まない）に反側側が1トリックも取らないと自動的な調整のトリック数が変わる。
- 「反則したプレイヤー」＝リボークしたプレイヤーがリボークの起きたトリックで勝つことが条件である、「反則したプレイヤー」のパートナーは関係ない。
- ディクレアララーがリボークしたとする。そのトリックはダミーのカードが勝っていたとき、反側側であるディクレアララーはリボークが起きたトリックを取っていない。自動的なトリック調整は1トリックである。
- リボークが起きたトリックでリボークした人がトリックを取るということは、通常ラフをしたということである（通常でないのはリードやプレイの要求に応えなかったとき）。

L64B

- 自動的なトリック調整を行わない場合でもリボークは成立していることに留意する。「ダミーにリボークはない」という言い方は誤りである。リボークはあり、リボークは成立したが、自動的なトリック調整がないというだけである。
- 自動的なトリック調整がなくてもC項により損害の補償が必要なときは調整を行う。

第64条 リボーク成立後の手順（続き）

C. 損害の補償

1. リボークの成立後、トリックの調整対象にならないリボークも含め、本条では非反則側が受けた損害に対する救済が不十分であるとディレクターが判断したときは、調整スコアを与えるものとする。
2. (a) 同じプレイヤーによる同じスートでの2回以上のリボークがあった場合（本条B項2参照）、2回目以降のリボークの1つ以上がなかったら非反則者側がより多くのトリックを取った可能性が高いとき、ディレクターはスコアを調整する。
(b) 同じボードで双方の側がリボークした場合（本条B項7参照）、一方の側の競技者が損害を受けたとディレクターが判断したときは、リボークがなかったときに起こりそうな結果に基づく調整スコアを与えるものとする。

- L64C
- 調整がなかったり自動的な調整では損害の救済に足りないときは、別途調整スコアを与える。
 - 調整スコアと自動的な調整はどちらかのみ適用する。
 - ただし同じスートで2回以上のリボークがあったときは、それぞれの状況で調整を査定する。2007年規則でトン・コイマン氏が解説した例を紹介する。

例C項2: ♠AKQ5
 ♠1074 ♠J9
 ♠8632

Nから♠Aをプレイ、Eはリボークした。続いて♠Kをプレイ、Eはもう一度リボークしたとする。現状では♠QをとってもEには♠J9が残っているので♠5が勝てない。NSは♠が3トリックとリボークの自動的な調整が1トリックとなる。

ではリボークが1回だったらどうかを考えてみる。Nが♠KQをとるとEから♠J9とWから♠107がプレイされるので、♠は4トリック取れる。さらにリボークの自動的な調整を1トリック与える。

反則者が反則行為を繰り返すことで利益を得てはならない。従って実際にはリボークが2回あったとしても、リボークが1回だったときを考慮して、♠4トリックとリボークの自動的な調整が1トリックにスコアを調整する。

- 同じボードで双方の側がリボークしたときはB項7により自動的な調整はない、実際のスコアをスタンドさせる。ただしどちらか一方が損害を受けていそうときはC項を適用する。スコアはリボークがなかったときに起こりそうな結果に調整する。

第14条 紛失したカード**A. プレイ開始前に不足が発見されたハンド**

あるハンドに13枚より少ないカードしかない一方、13枚より多いハンドもないことをオープニングリードが表向きになる前に発見したときは、ディレクターは紛失しているカードを捜し、

1. そのカードを発見した場合、不足しているハンドに戻す。
2. そのカードを発見できない場合、ディレクターは別のパックを代用してディールを復元する。
3. オークションとプレイは行われたコールのどれも変更することなく普通に継続し、この復元されたハンドにはすべてのカードが終始一貫して所属していたものとみなされる。

B. 後で不足が発見されたハンド

ハンドに13枚より少ないカードしかなく、13枚より多いハンドもないことをオープニングリードが表向きにされた後どの時点であれ（訂正期間終了まで）発見したときは、ディレクターは紛失しているカードを捜し：

1. そのカードをプレイされたカードの中から発見した場合、第67条を適用する。
2. そのカードをその他の場所で発見した場合、カードを不足していたハンドに戻す。調整やペナルティを科すことがある（本条B項4参照）。
3. そのカードを発見できなかった場合、別のパックを使ってディールを復元する。調整やペナルティを科すことがある（本条B項4参照）。
4. 本条B項の規定でハンドに戻したカードは、一貫して不足していたハンドに所属していたとみなす。このカードはペナルティカードになることがあり、またこのカードをプレイしなかったことはリボークになることもある。

C. カードの入れ換えから得た情報

カードを入れ換えたという情報は、間違った枚数のハンドを持っていたプレイヤーのパートナーには不当なものである。

- L14B4 ○プレイが始まってからカードの不足が発見されたときは、不足していたカードが一貫してハンドの中にあったものとして扱う。リボークになるときは以下のとおり。
- (1) スートへフォローする義務に違反した。
 - (2) リードの要求に応えなかった（第50条D項2(a)メジャーペナルティカード対して）。
 - (3) プレイの要求に応えなかった（第57条A項 ディフェンダーの早まったプレイに対して）。

第43条 ダミーが受ける制限

第42条で認められている場合を除き、ダミーは以下の制限を受ける。

A. ダミーが受ける制限

1. (a) ダミーは、他のプレイヤーが違反行為を指摘した場合を除き、プレイ中率先してディレクターを呼んではならない。
- (b) ダミーは、プレイ中違反行為を指摘してはならない。
- (c) ダミーは、プレイに決して参加してはならず、またディクレアラーにプレイについて一切情報を伝えてはならない。
2. (a) ダミーは、ディクレアラーとハンドを交換してはならない。
- (b) ダミーは、ディクレアラーのプレイを観察する目的で席を離れてはならない。
- (c) ダミーは、ディフェンダーのハンドを見てはならない。
3. ディフェンダーは、ダミーにハンドを見せてはならない。

B. 違反が起きた場合

1. 本条A項1やA項2に列記した制限に違反した場合、第90条に定めたペナルティを科すことがある。
2. 本条A項2に列記した制限に違反した後、ダミーが、
 - (a) ディクレアラーに間違ったハンドからリードしないよう注意した場合、どちらのディフェンダーもディクレアラーがどちらのハンドからリードするかを選ぶことができる。
 - (b) ディクレアラーのハンドからのプレイがリボークにならないかをダミーが最初に質問した場合、ディクレアラーはそのプレイが違法なものならば正しいカードに入れ換え、リボークが成立したものと第64条の規定を適用する。
3. 本条A項2に列記された制限に違反した後、ダミーがディフェンダーの違反行為を最初に指摘した場合は、その場で調整はしない。プレイは違反行為がなかったものとして継続する。ディフェンダー側が違反行為により利益を得たときは、プレイ終了後にディレクターはその利益を取り去った調整スコアを与える。ディクレアラー側はテーブルでの結果によるスコアを得る。

- L43B2 (b) ○リボークが成立したものと扱うときは以下のとおり。
- (1) ダミーがディクレアラーのハンドを見る目的で席を離れたり、実際にディクレアラーやディフェンダーのハンドを見て、
 - (2) さらにディクレアラーがリボークしていないかどうかの質問を最初にして、
 - (3) 実際にリボークしていたとき
- リボークが成立したものと扱うとき、まずリボークしたカードは取り消し、スートフォローできるカードに直す。ディクレアラーなので取り消したカードはハンドに戻す。そしてリボークが成立したものとトリックを調整する。もしリボークが成立したときの調整が2トリックならば、リボークは訂正したうえで2トリックを調整する。

(WBF Laws Committee 2000/1/12)

- L43B3 ○本条A項2に違反したダミーがディフェンダーのリボークの可能性について指摘し、実際にリボークしていたときは、リボークを訂正するがそれ以上の調整はない。違反行為がなかったものとして扱うので取り消したカードはハンドに戻す。ディクレアラー側はテーブル上のスコアが結果になる。ただしリボークという違反行為をしたディフェンダーも反則者側である。リボークが成立していたときの調整が1トリックならば、ディフェンダー側のみ1トリックを調整する。結果はスプリットスコアになる。

(WBF Laws Committee 2008/10/10)

- 本条A項2に違反していないダミーがディフェンダーのリボークの可能性について指摘したときは、リボークを訂正し、取り消したカードはメジャーペナルティカードになる。ダミーには質問の権利がないのでディクレアラー側も反則者側である。ダミーの違反行為によって利益を得ていたならば調整する。

第45条 プレイされたカード

- A. ハンドからのカードのプレイ
- B. ダミーからのカードのプレイ
- C. プレイしたとみなされるカード
- D. ダミーが指定されていないカードを取り上げたとき
 1. ディクレアララーが名指していないカードをダミーがプレイした位置に置いた場合、次のトリックに双方の側がプレイする前に間違いが指摘されたときは、このカードをダミーに戻さなければならず、間違いの後、指摘が行われる前にディフェンダーがプレイしたカードはハンドに戻すことができる。ディクレアララーのRH Oがプレイを変えた場合、ディクレアララーはそのトリックにその後プレイしたカードをハンドに戻すことができる（第16条C項参照）。
 2. ダミーが間違えて置いたカード（本条D項1参照）を変えるには遅すぎるときには、プレイはこのトリックもその後のトリックもカードの変更なしに普通に進められる。ダミーが間違えて置いたカードがトリックの1枚目のカードのときには、そのスートにフォローしなかったことはリボークになることもある（第64条A項、第64条B項7、第64条C項参照）。ダミーが間違えて置いたカードが進行中のトリックにプレイされて、ダミーが結果としてリボークしたときは、第64条B項3および第64条C項を適用する。
- E. トリックにプレイされた5枚目のカード
- F. ダミーがカードを指示した場合
- G. トリックを伏せること

- L45D2
- 第64条A項 『自動的なトリック調整』
 - 第64条B項3 ペナルティカードやダミーのカードをプレイしなかったことによるリボーク
 - 第64条B項7 双方の側がリボークしたとき
 - 第64条C項 『損害の補償』
 - ダミーが指示と違うカードをプレイした。双方の側が次のトリックにプレイするとプレイを訂正することはできない。「ディクレアララー側が」ではなく「双方の側が」であることに留意する。
 - ディクレアララーはダミーに♠Aのリードを指示した。ダミーは間違えて♡Aをプレイしたとする。ディクレアララーは♡を持っていてもおそらく♠をプレイするだろう。次のトリックに「双方の側が」プレイするとダミーの♡Aが成立するため、ディクレアララーの♠はリボークになる。そしてそのリボークは成立しているため訂正できない。

第50条 ペナルティカードの処置

ディフェンダーが早まって見せたカード（リードしたものを除く、第57条参照）は、ディレクターが別途の指定をしなければペナルティカードになる（第49条参照、また第72条C項を適用することがある）。

A. ペナルティカードは表向きに置く**B. メジャーペナルティカードかマイナーペナルティカードか**

アナーカードではなく、意図せずに（トリックに2枚プレイしたり、偶然カードを落とすなどして）見せた1枚のカードはマイナーペナルティカードになる。アナーカードや故意のプレイにより見せた（例えば、順番外のリードやリボークしてその後訂正するなど）カードはすべてメジャーペナルティカードになる。また、1人のディフェンダーに2枚以上のペナルティカードがあるときは、このカードはすべてメジャーペナルティカードになる。

C. マイナーペナルティカードの処置**D. メジャーペナルティカードの処置****E. ペナルティカードから得た情報****第54条 表向きに出した順番外のオープニングリード**

順番外のオープニングリードが表向きにされ、反則者のパートナーがリードを伏せて出しているときは、ディレクターは伏せて出したリードを取り消すよう命じる。さらに：

A. ディクレアラーがハンドを広げる場合**B. ディクレアラーがリードを受け入れる場合**

ディフェンダーが順番外のオープニングリードを表向きにしたときは、ディクレアラーは第53条で定めたとおり、この違法なリードを受け入れ、第41条に従ってダミーを広げることができる。

1. このトリックに対する2番目のカードはディクレアラーのハンドからプレイする。
2. ディクレアラーがこのトリックに対する2番目のカードをダミーからプレイしていたときは、リボークの訂正を除き、ダミーのカ

ードを取り消すことはできない。

C. ディクレアラーがリードを受け入れなければならない場合**D. ディクレアラーがオープニングリードを拒否した場合****E. 間違った側によるオープニングリードの場合****注釈 第50条・第54条**

L50B ○リボークして取り消したカードはメジャーペナルティカードである。

L54B2 ○順番外のオープニングリードを受け入れてダミーを開いた後は、次はディクレアラーの順番である。にもかかわらず2番目のトリックをダミーから引いた場合そのカードは訂正できない。ただしリボークならば訂正する。

第65条 トリックの並べ方

- A. 完了したトリック
- B. トリックの勝ち負けの確認
- C. 整頓
- D. プレイの結果についての合意

プレイヤーは取ったトリックの数を合意するまで、プレイしたカードの順序を乱さないようにする。本条の規定に従わないプレイヤーは、トリックの勝ち負けの主張や、リボークの主張（あるいは否定）が受け入れられにくくなる。

第66条 トリックの検査

- A. 現行のトリック
- B. 自分の最後のカード

自分の側が次のトリックにリードまたはプレイするまで、ディクレアラールとディフェンダーは、自分が最後にプレイしたカードを調べることができるが、見せてはならない。

- C. 終了したトリック

この後は、プレイが終了するまで、終了したトリックを検査してはならない（ただし、リボークの主張を確認するために必要な場合など、ディレクターが特に指示した場合を除く）。

- D. プレイ終了後

プレイ終了後は、リボークやトリックの勝ち負けの数の主張について解決するため、プレイしたカードとプレイしていないカードを検査できる。ただし、自分以外のカードに触れないようにする。このような主張があったがディレクターには事実の確認ができず、かつ一方の側だけがカードを混ぜている場合は、もう一方の側に有利な裁定をするものとする。

- L65D ○プレイしたカードの順番を乱すと、プレイを再現してトリック数の確認をしたり、リボークの主張が行われるときに証言の信頼度が少なくなる。ただし権利がなくなるわけではない。

- L66C ○第61条C項『トリックを調べる権利』にあるとおり、リボークの指摘があったとしてもプレイヤーには終了したトリックを検査する権利はない。
- ディレクターはむやみに「トリックを検査する権利を」行使すべきではない、リボークの成立が明らかなきに「トリックの検査」は必要ない。プレイ終了後に確認すれば問題ない。
- リボークが成立していないときや成立に疑問があるときに「トリックの検査」を行う。そのときも他のプレイヤーに見えないよう留意する。

- L66D ○第65条D項『プレイの結果についての合意』と同様
- 確認にあたってディレクターは、プレイヤーに自分のハンド以外のカードへ触れさせてはならない。これはハンドが入れ換わらないようにするため、非常に重要である。

第67条 過不足のあるトリック

A. 双方が次のトリックにプレイする前

B. 双方が次のトリックにプレイした後

双方が次のトリックにプレイした後、(プレイヤーのハンドのカードが多過ぎたり、少な過ぎたりし、プレイしたカードの数がこれに一致して過不足があるという事実から)、トリックに過不足があることをディレクターが確認したときは、次の手順をとる：

1. 反則者が過不足のあるトリックにカードをプレイしなかったときは、直ちに次のとおりカードを1枚表向きにさせ、反則者のプレイ済みのカードの中に置くよう指示する(このカードは過不足が起こったトリックの勝ち負けに影響しない)。
 - (a) 反則者が過不足のあるトリックにリードされたスートのカードを持っている場合、その中から1枚を選び、自分のプレイ済みのカードの中に置く。この反則者は過不足のあるトリックでリボークしたものとみなされ、第64条A項2に従って1トリック移行させる損失の対象となる。
 - (b) 反則者に過不足のあるトリックにリードされたスートのカードがないときは、任意のカードを選んで自分のプレイ済みのカードの中に置く。反則者は過不足のあるトリックでリボークしたものとみなされ、第64条A項2に従って1トリック移行させる損失の対象となる。
2. (a) 反則者が過不足のあるトリックに2枚以上のカードをプレイしたときは、ディレクターはプレイしたカードを検査し、そのトリックに表向きにプレイ済みのカード以外のカードを全部反則者のハンドに戻すよう指示^{*20}する(どのカードを表向きにしたか確認できない場合、反則者は過不足のあるトリックに合法的にプレイできたカードの一番高いランクのカード

^{*20}ディレクターは極力ディフェンダーのプレイしたカードが見えないようにするが、ディフェンダーのハンドに戻すカードが見えたときは、ペナルティカードになる(第50条参照)。

を残す)。過不足のあるトリックの勝ち負けは変わらない。

- (b) 戻したカードは一貫して反則者のハンドにあったとみなし、このカードを以前のトリックでプレイしなかったことはリボークになることがある。
3. ディレクターが、反則者は該当トリックにカードをプレイしたものの、そのカードをプレイ済みのカードの中に置かなかったことを確認した場合は、そのカードを探し出して反則者のプレイしたカードの中に置く。さらにディレクターは、同じカードが該当トリック以降にもプレイされ、この違法なプレイを訂正するには遅過ぎるときには、調整スコアを与えるものとする。

注釈 第67条

- L67B
- あるトリックにカードをプレイしないで、双方が次のトリックにプレイするとリボークしたものとみなされる。スートフォローするカードを持っていなかったとしても、リボークとして扱わなければならない。
 - 新たに置かれたカードは勝ち負けに関係がないので、第64条A項2「反則したプレイヤーがリボークの起きたトリックを取らなかったとき」を適用する、その後反則側がトリックを取っていれば、自動的なトリック調整は1トリックになる。
 - あるトリックに2枚のカードを重ねてプレイしていたとき、プレイされなかったカードは一貫してハンドにあったものとして扱われる。スートフォローの機会にフォローしていなければリボークになる。

第72条 一般原則**A. 規則の遵守**

デュブリケートブリッジ競技会は、厳格に規則に従ってプレイする。主な目的は、規則が定める合法的な手順および倫理基準のもとで、他の競技者より高いスコアを獲得することである。

B. 反則行為

1. たとえ規則に定められた調整を受け入れる意思があっても、故意に違反してはならない。
2. 一般的に自分の側が犯した規則違反を指摘する義務はない（ただし、説明の間違いに関する第20条F項、さらに第62条A項および第79条A項2参照）。
3. 2回目のリボークを犯したり、リボークに関係したカードを隠したり、早まってカードを混ぜるなどして反則行為を隠そうとしてはならない。

C. 損害の可能性に気づくこと

ディレクターは、反則者が違反行為を起こした時点でこの違反行為が非反則側に損害を与える可能性に気づくことが可能だったと判断した場合でも、オークションとプレイの続行を（終了していなければ）命じるものとする。プレイ終了時にディレクターは、反則側が違反行為から利益を得たと判断した場合、調整スコアを与える。

- L72B
- リボークを自ら申告する必要はない。ただし指摘されたならばリボークを隠してはならない。
 - リボークを隠すためにリボークをしてはならない。

リボークの裁定

リボークの裁定においては、まずリボークが成立しているかしていないかを判断する。基本的にプレイ中にディレクターが終了したトリックを確認する必要はない。リボークの有無自体でもめているときも、明らかに訂正するには遅すぎるときにはリボークの有無はプレイ終了後に確認することを宣言し、そのまま続行を指示するべきである。ただしプレイヤーの発言が要領をえず、リボークの成立自体について確認する必要があるときは過去のトリックを検証する。

1997年までの規則を覚えていて、非反則者が補償に不満を漏らすことがある。規則はあるべき姿に戻すよう改正されていることを説明し、判断基準はリボークしたプレイヤーがリボークしたときに勝ったかどうかだけになったことを説明する。

リボーク成立後のディレクターの自動的な調整は容易である。第64条C項『損害の補償』については非反則者に損害がなかったを確認すればよい。後は非反則者の主張に合わせてプレイを再現すると判別がしやすい。

リボークの裁定例（Sがダミー）

※内容が伝わるのが重要である。一例であることを考慮してプレイヤーに合わせて工夫すること。

プレイ中のテーブルでディレクターが呼ばれた

ディレクター：「いかがしましたか？」

プレイヤー(W)：「♠があったのに♡の4を出しちゃって、今気がついたので」

○プレイヤーはハンドから何かカードを出そうとしている。
混乱しているWが余計な行動を取らないように注意し、状況を把握するための質問をする。

ディレクター：「わかりました、出しかけてるカードはしまってください。」
「問題があったのは現行のトリックですか？終了したトリックですか？」

プレイヤー(N)：「もう次のトリックのリードをしたんです。」

ディレクター：「次のトリックにEはプレイしていますか？」

プレイヤー(E)：「まだプレイしていません。」

ディレクター：○状況を正しく把握したか具体的に確認する。

「前のトリックで♠が回っていたときにWはディスカードした、そしてリボークしていたことに気がついた。
という状況でよろしいでしょうか？」

○反論がなさそうなことを確認してから。

「そうしましたら、反則者側がまだ次のトリックに入っていないのでリボークは訂正しなければなりません。」

「まずNはリードをハンドに戻してください。」

○カードをハンドに戻したことを確認してから。

「それでは前のトリックを皆さんオープンしてください。
リードはどこからですか？」

プレイヤー(N)：「ダミーからです。」

ディレクター：「わかりました、Wはカードを♠に出し直してください。

Nはプレイを変更することができますが、どうしますか？」

プレイヤー(N)：「このままでいいです。」

ディレクター：○Eはカードを変更する権利がないので、Eにはカードの取り消しを聞かない。

○リボークの訂正時にはカードの枚数がずれることがあるので、必要ならカードの枚数を確認するとよい。

「では、前のトリックを終了します、カードを伏せてください。皆さん残りのハンドの枚数は○○枚で問題ありませんか？」

(続く)

実際の裁定例

「では次のトリックに進みますが、Wが取り消したカードはメジャーペナルティカードになります。」

※「取り消したカードは」と言うより「♡の4は」と言うほうが具体的でわかりやすい。ペア戦などでは情報がまわりに伝わらないように配慮する。

「Wはプレイする最初の機会にプレイしなければなりません。ペナルティカードが机の上であり、Eにリード権が入ったときはリードに制限があります。」

「Nは改めて好きなカードをリードをすることができます。」

プレイヤー(N)：○Nはリードを変えた。

ディレクター：「Nが取り消した先ほどのリードはEWには不当な情報です。それではプレイを続けてください。」

○ペナルティカードがなくなるまでディレクターはテーブルに留まる。